（別紙２）

審査結果の要旨

氏名　堀内　秀樹

堀内秀樹氏は過去 25 年にわたり東京大学埋蔵文化財調査室に助手・助教として勤務し、江戸時代加賀藩邸・大聖寺藩邸跡の発掘調査に従事してきた。そこで出土した数十万点に及ぶ陶磁器資料について、詳細かつ総合的な分析を進め、それを日本各地の遺跡、ヨーロッパに及ぶ海外での出土資料と比較検討し、近世陶磁器の流通と消費の実態について実証的に解明したのが本研究である。どの時代についても考古学が最初に着手する作業は、遺物を年代順に整理する編年の組み立てであるが、堀内氏は東大本郷キャンパス出土資料の検討から、江戸時代陶磁器を 10～20 年刻みの 16 期に配列し、江戸考古学の年代判定のスタンダードとされる、いわゆる「東大編年」構築において中心的役割を果たすとともに、本研究の確固たる土台を築いた。

さらに年代の違いによる陶磁器の様相の違い、大名屋敷の中の地点ごとの廃棄された陶磁器の様相の違い、都市としての機能の異なる地区ごとの様相の違いを縦横に比較検討し、そこに都市としての江戸の建設期、徳川家への臣従を中心とする武家儀礼様式の整備期、続く経済的停滞と倹約政策の時期、経済的活況と町人文化の発展を背景にする陶磁器生産の多様化の時期という年代的な変化を読み取り、同時に大名屋敷内における、儀礼用食器を主とする御殿空間と他の地区の機能の違い、都市空間内での宿場や遊興地などの特性を読み取るとともに、陶磁器に反映された盛り場の成立、商品に関する情報と流行、煎茶など新しい習慣とともに渡来した外国製品とそれを模倣した国産品、植木、動物の愛玩など、江戸の町人文化のさまざまな側面を解明した。

最終章では視野を大きく拡げ、オランダの遺跡で出土した日本・中国製の陶磁器を実地に検討し、沈没した貿易船の積荷の内容とも比較し、ヨーロッパでの嗜好の変化に合わせた陶磁器生産と輸出が行われ、復活する中国製品に対して日本は高級品で対抗し、最終的には現地製品の普及によって東洋陶磁器の輸出が衰退することを解明した。

本研究は、これまでの考古学的陶磁器研究の中心であった生産と流通という側面を超え、消費のありかたに特別な注目を払い、背景にある社会や生活文化、使用者の意識面まで照射した研究として高く評価される。

今後は文献史学による近世史研究の膨大な成果を参照し、物や現場を重ね合わせ、新しい歴史描写を進めるなど、近世考古学の課題には限りがない。そこまで展望すると、本研究は長い道のりの第 1 歩にすぎないのかもしれない。しかし近世の考古学と呼ばれるものが開始されてまだ 35 年、堀内氏はそのうちの 25 年間この新分野の開拓に従事し、陶磁器という物質資料を通して、近世の文化や経済のさまざまな側面が具体的に把握できることを示し、近世考古学をひとつの学問分野として確立させることに大きく貢献した。本審査委員会は、その成果である本論文が博士（文学）の学位を授与するのに十分なものであると認定する。